

平成19年度「専修学校・高等学校連携等職業教育推進プラン」成果報告書

事業名	環境問題をテーマに環境学習を通しての若年者職業観育成講座(文理自然塾)		
法人名	学校法人 文理学院		
学校名 ((2) の み)	文理ランドスケープ園芸専門学校		
代表者	理事長 千葉 雅 保	担当者 連絡先	渡辺 嘉昭 TEL022-215-5112
<p>1. 事業の概要</p> <p>将来、環境関連に携わるであろう若年者(特に小学校高学年～高校生)へ、全4回の環境問題をテーマにした講演と関連の体験を行い、職業観の早期意識付けと育成を図る講座を実施した。また、本校のビオトープとそれを囲む里山も利用して、自然観察なども併行して環境に対して意識付けを行い職業観の啓蒙を図った。</p> <p>○第1回講演:「農業」という仕事と「生き物」の暮らし。体験:田んぼづくりと生き物の暮らし ○第2回講演:「子どもたちの心を育てるエコロジカルランドスケープ;学校ビオトープ。体験:栗生小学校のビオトープ見学 ○第3回講演:里山復活。体験:炭焼き ○第4回講演:鳥のあしあと けものあしあと。体験:鳥の羽の標本づくりに挑戦</p> <p>2. 事業の評価に関する項目</p> <p>①目的・重点事項の達成状況</p> <p>低学年から環境への関心度を高めるため小中高校生の集客に力を入れたが、時期的なこと(開催日期間の時期はクラブの大会や試験等が多く時間が取れない状況)や関心度の低さにより残念ながら参加者はいなかった。しかし、間近に社会へ出て行く、専門学校生や大学生で、関心の高い学生が参加したことは幸いであり、今回の講演や体験が即、職業に繋がり活かされていくことを確信した。また、今年度は講話や体験の中に更に職業に結びつけていくような、内容を昨年以上に盛り込んで実施したものの「環境問題」が、まだ危機的に感じていない感があり未消化に終わった感じがする。</p> <p>②事業により得られた成果</p> <p>①農業の現状を環境問題と重ね合わせた講演と現場見学を実施。農業従事者の不足と今後の日本の農業のあり方を身を以て教えられた。 ②学校ビオトープの必要性を設計者の立場と生徒や保護者、地域の立場から解説。 ③炭焼きを通して里山の重要性と炭の必要性、物作りの大切さを体感した。 ④自然環境破壊と環境改善を「鳥の羽づくり」を通して体感した。 今回の事業による成果は、数名(母集団が少ない)ではあるが、参加者が職業への方向が診定まったということで概ね目的が達成できた。</p> <p>③今後の活用</p> <p>正直、高校生以下の生徒を環境学習から環境に携わる職業へ結びつけるには、やや困難さがある。今後将来的に環境関連企業は大きく飛躍することになると思われるが、学校教育での学習時間数の少なさや物づくり体験の少なさ、関心の低さが、若年者の職業観動機付けを拒んでいるような気がした。今後、ちまちまでもこのような体験や見学を含んだ講座を若年者に提供していかなければ、発展性はないと思われる。</p>			

④次年度以降における課題・展開

「環境問題」をテーマにして職業への意識付けと職業観を育成していくとしたら、今回は、本校の持っている特色を通して講座内容を企画したが、子供たちに一番の関心事を探り、その関連の体験や見学を含めた講座企画が望ましいと思われた。例えば地球温暖化という環境問題に関心があるとしたならば、その原因となる窒素酸化物の排出量を減らすという問題があり、関連の自動車業界やエネルギー関連企業の講話や体験、見学を含めた講座企画等を検討してみても良いと思った。(高校生以下の生徒の関心事かどうかは、更に調査を必要とする。)

3. 事業の実施に関する項目

①職業体験講座、講演会の実施

実施日	テーマ(講演者)	申込者数	参加者数	内容・感想
第1回10月28日(日) 10時～15時	『農業』という仕事と『生き物』の暮らし 田んぼづくりと生き物の暮らし 田村孝浩氏 (宇都宮大学農学部農業環境学科助教授)	6	6	農業と生き物の関わりから、農業農村が持つ役割や農業の今昔、農村の生態系について解説。農業の重要性を分かりやすく説明された。次に「田んぼに生き物を呼び戻せ」ということで、大崎市北小塩地区の事例をあげて説明。農業の合理化と環境問題との責め合いについて事例を発表された。最後に生き物が住みやすく環境に優しい農業の提案を事例を発表。午後からは、大崎市北小塩地区へ移動し、事例発表された田んぼの視察と田んぼの生物の採取や観察を行った。食糧難に向かうにあたって農業の重要性と合理化、そこに発生してくる環境問題それらを解決する知識と経験を今回の講演と体験で学ぶことができた。参加者は農業に従事する職業観としての観点を得ることが出来たと思う。
第2回11月4日(日) 10時～14時	子どもたちの心を育てるエコジカルランドスケープ 「学校ビオトープ」 増田豊文氏 (東北文化学園大学科学技術学部講師)	28	30	「自然環境破壊が子どもたちの未来を奪う」を切り口に環境問題と学校ビオトープの事例をつなぎ合わせて解説された。先生が設計された学校ビオトープ「くりりん」の事例発表により大人の役割、子どもの役割、社会の役割を提案し、ビオトープの感性教育の可能性や学習効果、地域とのコミュニティ効果、そして自然環境問題には、環境省、農林水産省、文部科学省の三省の協力が不可欠であると言うことをとくと話された。午後からは栗生小学校にある学校ビオトープ「くりりん」を見学し、子どもたち(人類)には、自然やビオトープの必要性を再認識した。
第3回11月23日(祝) 10時～14時	里山復活 炭焼き 亀山敏義氏	5	5	最初に11月20日(火)に試行的に炭焼しておいた本窯を開けてみた。残念ながら炭焼不足で失敗であった。再度、炭焼窯に物を入れて炭焼させ4時間焼いて空気口を閉じた→11月25日(火)窯開き予定。なお、11月23日(祝)当日用として一斗缶の簡易炭焼を同時並行で実施したが、これも9割失敗。結局炭焼は失敗だったが炭焼体験と、その後の講義により、炭焼が環境へ及ぼす好影響と炭焼の原理が参加者へ確実に浸透した。失敗の原因は、木材の大きさと完全に乾燥していなかったことによる炭焼不足。また、空気の流れが悪かったこと(煙突が短かった)が要因らしい。
第4回12月2日(日) 10時～14時	鳥のあしあと けものあしあと (様々な標本を実物を交えて紹介) 斉藤千映美氏 (宮城教育大学環境実践研究センター准教授)	6	6	スズメとシジュウカラの標本作りをメインに体験を行った。時間がかかった分仕上がりは良く、参加者は貴重な体験に感激していた。講義は青葉山に生息する生き物の事例発表で、環境の変化によって生態系が変わりつつあることと、生き物と共生できる環境づくりの必要性を解説され、鳥の羽の標本づくりと環境問題をテーマとしての職業観育成の繋がりが持つことが出来た。特に、今回のスズメの死骸は、「ガラス張りのビルに衝突して死んだ」と言うことで、生命の尊さや環境にやさしい街づくりを考えさせられた。講義では「仙台市青葉山に生息するけもの」の現状について事例発表されたが、環境の変化で生物の生息が危ぶまれていることを理解した。

②その他

・実施風景写真データは本校ホームページに掲載